

「むかしの冬の暮らし展」

今回の企画展は、「むかしの冬の暮らし展」と銘打って、冬の生活に関係する衣・食・住の道具や、正月の道具を取り上げました。今では見かけなくなった道具や、形を変えてしまった道具を紹介することで、少し前の冬の暮らしを想像頂けたらと思います。

—あたためる道具—

寒い冬、家の中で過ごすには、体をあたためてくれる道具が欠かせません。昔から様々な方法で暖を取る道具が使われてきました。

○火鉢（ひばち）

中に灰を入れ炭火を起こして暖房や湯沸しに用いる器具。この火鉢は丸火鉢と呼ばれ、丸く削った木の内側に銅製の炉を入れたもの。



○櫓炬燵（やぐらこたつ）

複数人間が同時にあたたまることのできる暖房具。櫓に組んだ高い台に木綿蒲団等をかけて使う。



○湯湯婆（ゆたんぼ）

中に熱湯を入れ寝床に入れて足等を温める暖房器具。江戸時代中期にはすでに円筒形やかまぼこ型の陶器製のものが使われていた。



○豆炭行火（まめたんあんか）

手足をあたためる移動式の暖房具。炭を燃料とするが、豆炭を燃料とした暖房器具で布袋に包み就寝時に布団に入れ用いられた。着火した豆炭を容器の中にあるくぼみに入れて使用する。



—冬のよそおい—

寒い時期には、着物の上にあたたかい防寒着を重ねました。外出する時には肩から羽織ったり、体をあたためたりするものを使用しました。

○丹前（たんぜん）

着物や寝間着の上に着る防寒用の広袖の綿入れ。関西地方では「丹前」と呼ばれ、関東地方では「どてら」とも呼ばれる。



○ねんねこ半纏（ねんねこばんてん）

幼児を背負った上から羽織る綿が入った半纏。子守半纏ともいう。



○懐炉（かいろ）

懐中に入れて、腹部や腰をあたためる携帯用の暖房具。古くは焼き石を布でくるむ温石や、瓦を塩でくるんで焼いたものも使われた。元禄ごろに懐炉灰を金属製の小箱に入れる懐炉が出現した。



—食べる道具—

冬は体をあたためる料理が多く作られ、年末年始になると来たる新年を祝うために伝統的な料理が欠かせませんでした。また正月になると盛り付ける食器も華やかなものが用いられました。

○搗臼（つきうす）

輪切りにした木材を削って窪めた縦臼。蒸したもち米を入れて杵で搗いて餅を作るのに用いた。最近では材料の減少や手入れが簡単なことから石臼の方が主流となっている。



○横杵（よこきね）

筒型の木の上部に、長い柄を差し込んだ槌形の杵。搗臼で穀物や餅等を搗くのに用いた。この杵は搗く部分が丸く凸形になっており餅搗き用。一本の棒の中央を細く削って、握る部分にした杵を縦杵という。



○蝶足膳（ちょうあしぜん）

食卓や卓袱台以前に使われていた食器を載せる台。間が羽をひろげた蝶の姿になるようにかたどった脚をしている。正月や祝い事のときに食器を載せて用いた台で格調が高く、一般の日常では使われない。



○銚子（ちょうし）

酒を盃に移すときに用いた器で近世では儀礼用や、正月の御屠蘇を注ぐときに用いられる。元は木製や金属製の器に長い柄を付けたもので桃山時代にフタ付きの提子形のものが登場した。



—正月の風景—

古来より日本人は、新年の始まりとなる正月に縁起の良い飾りをたくさん飾ったり、伝統的な遊びをしたりすることで一年がよい年になるよう願いをこめました。

○注連飾り（しめかざり）

正月に年神を祀るための依り代として各家庭の玄関に飾られていた。紙垂れは邪気を払い神域を示し、稲穂は五穀豊穡を祈るための飾りである。正月飾りの代表的なもので、玄関だけではなく車にも付けられることもある。



○羽子板（はごいた）

正月の代表的な遊戯である羽子つきをする道具。室町時代に蒔絵を施した装飾的な羽子板が出来、元禄時代には役者の似顔絵や美人画の押絵羽子板が人気を呼んだ。



○羽子（はご）

羽子板で撞つて遊ぶためのもので玉に使われているムクロジは「無患子」とも書かれ、子どもが患わないとの意味が込められている。江戸時代の頃、京都や大阪では玉の部分と羽根を竹でつないだ形もあった。



参考文献

- ・『日本民具辞典』日本民具学会編集 1998年5月発行 ぎょうせい
- ・『絵引民具の事典』工藤員功編 2008年9月発行 河出書房新社